

第47回 85年ぶりの「新・松江城築城物語」

昭和5年(1930)5月30日、『島根縣史』九「藩政時代下明治維新期」が出版された。編纂を野津左馬之助が担任し、島根県史蹟名勝天然記念物調査事務嘱託須田主殿らが編集上の援助を行っている。今からちょうど85年前のことである。「松江城築城物語」を整理する過程で、改めて野津左馬之助の県史編纂態度に触れる思いがした。松江城と松江城下町の建設事情については、現在の松江市の発展につながる重要事にも関わらず、今日まで野津の記述を超える文献は見いだせないのである。

さて、松江城の築城と城下町の建設を行った堀尾氏は、堀尾忠晴の死去により寛永10年(1633)に改易(無嗣断絶)となった。このため、松江城の築城と城下町の建設についての一次的な史料はほとんど残されていない。

今日伝わる松江城築城に関する様々な記述は、堀尾氏の改易後に記された文献史料、あるいは成立の根拠が見出せない「お話」(創作というより、文献成立頃の伝承を反映したものもある)などを用いたものであることから、いわば「松江城築城物語」とでも呼ぶべきものである。しかし、この「松江城築城物語」がどのような文献資(史料)をどのように用いて組み立てられてきたのかを確認し、そのうえで数少ない築城頃の一次史料と照らし合わせることで、「松江城築城物語」の中に歴史的な蓋然性を見出していく作業は重要である。

結果的に85年ぶりとなった「松江城築城物語」の徹底した検討(確認できる資・史料を網羅・分析し、歴史的蓋然性を見つける)は、『松江市史』別編「松江城」の査読検討会を進める過程で史料編纂室を中心に取り組んだものである。

別編「松江城」の査読検討会は、編集過程の中で、提出いただいた原稿の調整を行うもので、西尾克己松江城部会長、和田嘉宥G長、河原莊一郎G長、松尾信裕専門委員、岡崎雄二郎専門委員、編纂室松江城部会担当により、原稿の集まり具合で不定期的に会合を持っていた。平成27年3月の査読検討委員会では、山上雅弘氏、岡崎雄二郎氏の執筆原稿を読み合っていたが、内容は執筆者の新知見のほか、「千鳥城取立古説」他いくつかの文献の部分部分を織り交ぜた新しい「松江城築城物語」となっていたのである。驚いてその理由を探ったところ、執筆者の情報提供要請に応える形で、十分な史料批判と利用上の注意を伝えないまま、編纂室担当者から資料が提供された結果であることが分かってきた。資・史料提供の在り方を深く反省したが、これを契機に、これまでの「松江城築城物語」を整理し、現存する一次史料、築城後であっても信頼のおける文献史料から、現時点で確認できる「新・松江城築城物語」を再構築することとなった。

査読検討会で議論するための資料整理は史料編纂室で行うこととなったが、今日伝わる「松江城築城物語」はどのような文献資(史)料を基に組み立てられてきたのかを確認するために、『島根縣史』にみる「松江城物語」を分析し、近世から近代にかけての文献資(史)料と比較することで物語の成り立ちを整理するという手法をとった。

そこで、『島根縣史』にみる「松江城物語」を分析したのち(資料1)、次にこれらの物語が近世から近代にかけての文献資(史)料にどのように記されたかを比較照合したが、この史料の洗い出しと照合作業は、史料収集に天才的な力を発揮する史料編纂室福井専門調査員の労による((資料2)「松江城築城物語」に関する資(史)料一覧)。また、洗い出した一次的史料にみる松江城築城関連記事も整理し、編年表とした((資料3)一次的史料にみる松江城築城関連記事編年表)。

ちなみに、『島根縣史』は野津左馬之助氏を中心に1921年(大正10)から1930年(昭和5)にかけて編纂されたもので、綿密な史料調査によって編まれたものとして今日でも一定の評価が与えられている。松江城の築城についても多くの文献資(史)料を用いて記述しており、後に刊本として発刊される様々な「松江城築城物語」紹介本のベースとなっている。85年前の仕事であるにも関わらず、また、現在の松江市の発展につながる重要事にも関わらず、さらには、松江城に関する文献は『島根縣史』以降あまた出版されているにも関わらず、今日まで野津の記述を超える文献は見いだせない。

以上のような資料整理を経て、平成27年(2015)7月24日、松江市史編集委員会松江城部会の主催で、「「松江城築城物語」に関する文献史料検討会」を行った。(検討会では、議題を以下(1)から(8)とした。(1)『島根県史』にみる「松江城築城物語」(資料「「松江城築城物語」と関連する文献資(史)料について」)(2)『島根県史』と近世、近代の文献資(史)料(資料「「松江城築城物語」に関する資(史)料一覧」)(3)一次的史料にみる松江城築城関連記事(資料「一次的史料にみる松江城築城関連記事編年表」)(4)抽出した一次的史料の検討、補足史料の検討(一次的史料の検討・評価、「堀尾古記」「太閤記」「雲州松江城之縁起」「雲州松江城之事書」「千鳥城取立古説」の評価)(5)文献史学からみた「松江城築城物語」について(6)考古学・建築学からみた「松江城築城物語」について(7)「松江城築城物語」にみる歴史的な蓋然性(8)今後の検討課題について検討を行った。参加者:西尾克己、山上雅弘、佐々木倫朗、和田嘉宥、岡崎雄二郎、西島太郎、川上昭一、小山泰生、稲田信、福井将介、石塚晶子、内田文恵、北村久美子、小山祥子)

一連の資料整理と「文献史料検討会」によって、野津左馬之助が著した『島根縣史』での「松江城築城物語」にも、歴史的な蓋然性が認められないものも多く含まれるが、近世の文献でもしばしば見られる、「松江城は慶長12年に着工し、慶長16年に出来た」という年代観は概ね正しいのではないかと結論に至った。また、野津が『島根縣史』での調査で見出した「堀尾古記」は、堀尾氏の動向を知る上で貴重な一次史料として取り扱えそうだと確認もできた。一方で、富田城からの移城を決断する時期、「城地移転を將軍秀忠に出願し、許可を得たのは慶長8年」とする根拠、「慶長13年10月2日松江越し」(堀尾古記)の評価、工事年次・工程や様々な伝承の評価など、未消化の課題も残ったが、編纂室での資料整理と文献史料検討会での議論を基に「松江城築城物語」にみる歴史的な蓋然性を、文献史学の研究者の立場から佐々木倫朗先生に「松江市史研究7号」でまとめてもらうことでご了解をいただいた。

松江城部会査読検討会で始まった「松江城築城物語」を再構築する作業（「新 松江城築城物語」）は、「松江城築城物語」に関する文献史料検討会を経て、85年ぶりの大きな作業を行ったのである。

【今後の課題・・・継続的な調査・研究体制の必要性】

松江市史料編纂室では、平成21年の設置以来、計画に沿った『松江市史』の刊行(全18巻→H27年度で10巻)と、基本調査、付帯出版物の刊行を行ってきました。古代から松江開府頃までの松江市域にかかわるほぼ全ての文字史料(文献史料)の集成(約3,600点)、松江市域にかかわる絵図類の集成(約1,500点)、約8万点の近世文書の調査・目録化、各種付帯調査、松江に関する歴史研究成果の発表(松江市史研究、ふるさと文庫、松江市史講座)などを行ってきました。松江城国宝化を決定づけた「松江城天守祈禱札」の再発見や「初代松江警察署」の認定は、史料編纂室の地道な調査の中での出来事です。

松江市域の最大の特徴は、古代から現代にいたるまで、出雲地域、島根県の政治権力の中枢が置かれた場所であり、結果的に山陰の政治・経済・文化の中核地であったことです。

そのため、松江市にはびっくりするほどの貴重な歴史情報が残されており、それらが驚くほど手つかずの状態です。一方で、根拠が分からない「物語」のような話が、松江の歴史を説明する場面で多々見られます。

松江市には、今後とも市史編纂事業を受け継ぐような継続的な調査・研究体制が必要だと実感する所以です。

(「新・松江城築城物語」掲載予定の「松江市史研究7号」は平成28年3月刊行(予定)です)

平成27年8月3日：松江市史料編纂室長／稲田信